

いたちかわらばん

通刊39号 鮰川・独川 / 川原番・瓦版 07 秋号



【版画 宗森英夫】

極楽広場 (荒井沢)

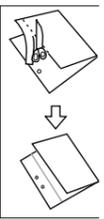
荒井沢市民の森を歩いてみると、あちらこちらに断層が見えます。断層は何万年もかかって作られるそうで、地球の歴史を考えながら見ていると、その間からほんの一滴ずつポトポトと水が落ちていきます。それが下の方になるに従ってちよるちよると流れ、岩から落ちてする時はざあざあと音をたて、いよいよ小川になってさらさらと流れ、メダカやドジョウ達が泳ぐことになる。小川が極楽広場の方に曲がり、しばらく分かれて歩いていくと、やがて洗井沢小川アメニティに出てしっかりと流れるようになります。

この場所の、愛護会の人たちと近所の方々の手入れの良さは、素晴らしいものです。近所の方々は毎日草取りをして、四季折々の草や花を植えてくださるので、とてもきれいです。小川自体は、八年前に栄土木事務所が、できるだけ自然に近いものになるようにと大小の岩や石等で土留めをしてスロープをつけ、車イスの方でも水の近くまで行けるように設計しました。五年くらい前から、六月の初めには螢が飛ぶようになりまし

この小川の水が暗渠に入ったり外に出たりしながら、洗井沢川せせらぎ緑道の流れで天神橋近くでいたち川に合流しているのかと思うと、五木寛之氏書くところの「大河の一滴」がここにありと、一寸ロマンチックな気持ちになりました。(かずちゃん)

(注) この一帯は、地元では昔から「あらいざわ」と呼ばれており、市民の森は「荒井沢」と名付けられましたが、小川アメニティについては、川が荒れないようにと「洗井沢」と名付けられたそうです。

この部分を切り取ってファイルにすると便利です



身近な自然 いたち川を見つめよう

小学校理科研究会 栄区臨地研修会報告

週のはじめの曇天からカラッとした天気になった、7月25日水曜日、栄区の理科研究会臨地研修会が開催されました。「身近な自然、いたち川を見つめてみよう」をテーマに、キャリア・コミュニケーターの和久井征治さんを講師に迎え、研修会が始まりました。

予備知識として、以前のいたち川の様子と今の様子とをくらべ、どんなところが変わっているのかを資料を見ながら学習しました。そして、そのやり方を見に韓国からも見学者が来て、それが実践されたと聞いて、グローバルな話にびっくりしました。

川まで歩いていくと植物がたくさん。オオブタクサやカラムシなど、名前だけでなく由来などにもふれられていて、うんうんと納得の声。クズやイタドリなど食べられる植物になると思わずメモをとる手に力が入りました。

水辺広場では大きな植物が育たないようにする工夫や、水辺に植物が生えるよう「植生ロール」をつける工夫など、よく見ないと分からない秘密がたくさんありました。子どもたちにちょっと自慢できることが増えました。

扇橋の水辺から支流を上るとコーン式の魚道がありました。大きな魚は上れないのですが、アブラハヤやヨシノボリならあがれるそうです。目をこらしてみましたが、残念ながら上がっている姿は見られませんでした。

さて、ちょっとブレイクタイム。

Q1. 尾月橋近くの川の中程に、木の棒(およそ2m)は何のために立てられているか。

Q2. 扇橋の水辺広場から支流を上ったところに水車があります。何のためにあるのでしょうか。生き物を見に来る人のために、そしてそこに住んでいる生き物のために、いろいろなことがされていることに驚きました。

川に近寄ってみるとシラサギがいたり、扇橋の近くではカワセミがいたり、思わぬ出会いがありました。

暑かったり、虫に刺されたりと自然の中ならではの大変さもありましたが、楽しくいろいろなことが学べました。



いたち川の近くでの説明



川の中に謎の木の棒が!



アオバズクが来る木

<クイズの答え>

- A1. カワセミなどの鳥がとまれるようになっている。近くにはカメラマンがその瞬間を待っていました。
- A2. 鉄分が多い水のため、曝気(ばっき)して鉄分を酸化させ、水をきれいにしている。そのため水車の近くはオレンジ色になっている。

(栄区 理科研究会 上郷小学校教諭 中村純)

発行年月 2007年9月 通刊39号

発行：独川OTASUKE隊 (いたちがわおたすけたい)
 OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係 〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19
 TEL 045-894-8161 FAX 045-895-2260
 栄土木事務所下水道・公園係 〒247-0007 横浜市栄区小宮ヶ谷1-6-1
 TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421
 (お便り・お問い合わせは こちらまで)

椎郷堀～荒井沢市民の森方面

<前号から続く>

飯島方面の水流に別れを告げてからはいたち川の上流に向かってのんびりと進む。川べりの道には、春の訪れを味わうかのように散策の人々が大勢行き交い、トサミズキや白モクレンが咲き、川面をカワセミが飛翔し、川辺にはアオサギが佇み、アカミミガメが岩の上で日向ぼっこしている。そこには春先ののどかないたち川風景があった。

海里橋に着いた所でメンバーの中の Y 氏が所用のため離脱、8 名になった OTASUKE 隊は橋を渡って暗渠をたどりながら鎌倉女子大の裏側から環状 4 号線に出る。公田小入口交差点を突っ切り、殆どが暗渠のため水流を見ることができないまま椎郷堀を歩く頃は既に正午を過ぎていた。

道を左（東側）に折れてから公田小前まではかなり急な坂道だが、最近開発されて高いコンクリート壁が築かれている。坂道を埋めるように築かれているので巨大な擁壁がそびえている感じだ。表現は悪いが、さながら山の中に城を築いたような様相を呈している。

公田小前信号を右に折れて暫く坂道を上って行くと荒井沢中谷公園に突き当たり、そこは山裾になる。直ぐ近いグランド・キャニオンを眺めながら階段を上り林の中を進む。今泉北・自然環境保全地域と書かれた大きな看板が現れた。今泉は鎌倉市の地名だから横浜市と鎌倉市の市境を歩いていることになる。暫く行くと目標にしていた富士講の石碑が現れた。

自然石でできた人の身長ほどもある大きなもので、碑面には「南無仙元大菩薩」と刻まれている。通常、富士講の碑面は富士山に正対しているというのだが、富士山は見えなかったのでコンパスを取り出して方向を見定めてみるとそれよりも僅かに南を向いているように思えた。

西側は開けていて大船や遠く藤沢の町なみが見えるなど見晴らしが利く。少し宣伝してこの碑を見に来る人が増えてもいいかな、と思われた。それでも訪れる人はいるとみえて石碑にはお賽銭と思われる硬貨が数枚上がっていた。我々はお賽銭を上げることなしに記念写真を撮ってからボトルの飲み物で咽喉を潤しただけだ。考えてみたら今朝歩き始めてからこの 3 時間余全く飲んだり食べたりしていなかったのだった。こんなに根を詰めてやらないでもう少し余裕を持った探査活動をした方が良さそうだな、と思った途端になんの脈絡もなく猛烈な空腹を覚えた。

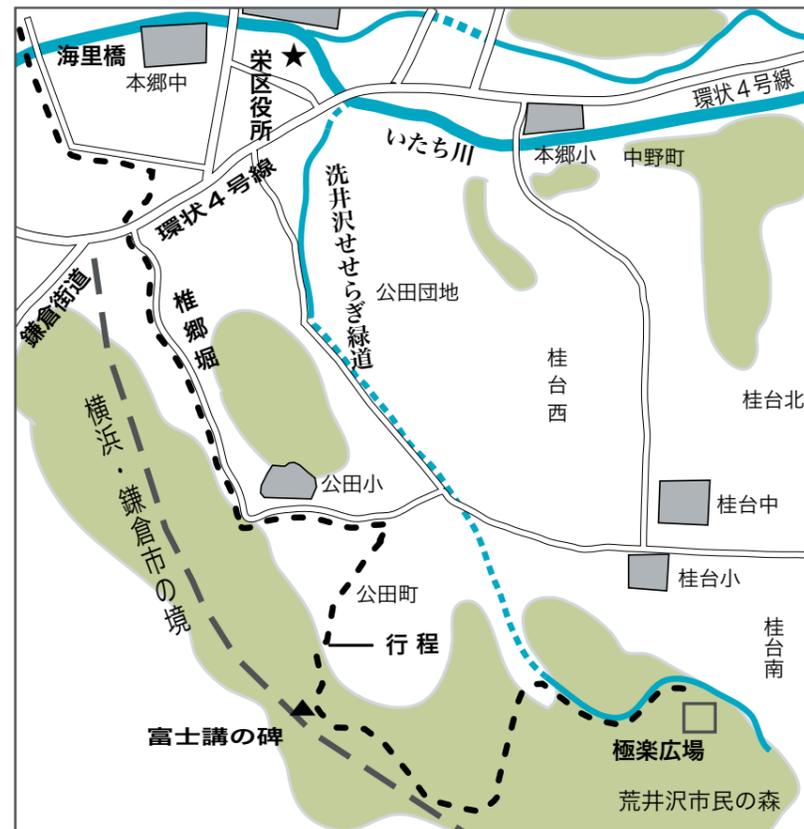
この尾根道が分水嶺となっていて、西が鎌倉の砂押川、東がいたち川に分けている。この地で午後からセミナーの講師の仕事に出掛けるという F 氏が帰ることになった。時刻は 12 時半を遙かに回っている。皆城山頂上で昼食という予定だったが木々が繁茂していてランチ会場に相応しい場所が無さそうなので一気に山を降りて荒井沢水辺愛護会の活動拠点である極楽広場に行くことにした。

食事にありつくという明確な目標設定が山道を下る足を速める。そんなに時間を要しないで極楽広場に着くことが出来た。

ここでは、OTASUKE 隊メンバーに愛護会の活動家・K 氏ご夫妻がいるものだからさながら我が家の庭で野外パーティをするような雰囲気である。屋根の掛かった休憩場所の、直ぐそばの半切りドラム缶をかまどにして薪が火炎を上げており、大きなやかんに音を立ててお湯が沸いている。

ぶ厚い木のテーブルに並んだご馳走が凄い。採れたての大きな椎茸が旨そうに焼かれて銀紙に載せられている。ほどよく漬け込まれた漬物がある。予め用意されていた缶ビール、持参したスキットのウイスキーと紙パックのお酒・お茶など、まずは乾杯だー。乾いた咽喉に染み通る美味しさなり、正に、甘露！甘露！

同じテーブルで、活動を終えて昼食中の愛護会の方々とおかずを交換したり歓談しながら、持参のお弁当を平らげたところで 6 時間の長きに亘る分水嶺探査を終えた。



我々が歩いた飯島市民の森といい皆城山といい名前は立派な山ではあっても標高は 100m にも満たない小山である。その峰をさまよいて歩き、分水嶺を見定めようとしたのだがそれは間違っていることに気が付いた。

通常、源流を調べる時は川口から遡って上流を目指してゆく。そして源流の上に位置する山が分水嶺なのである、という単純なこと気が付いたのだ。だから、昨年来の源流探査の時点で実は分水嶺探査も終わってしまった、というのが正解なのではなかったのだろうか。（ピンテール）

リレートーク

弥生台日記

相鉄いずみ野線弥生台駅の北口から徒歩で 2 分のところに、約 5 ヘクタールの緑地が残っています。緑地はコナラなどを主体とした自然林と、スギ・ヒノキの植林から構成され、森の一番奥には休耕田を主体とした湿地（「亀谷戸」と呼びます）があります。さらに湿地の湧水は、せせらぎに集まり森を潤しながら流れ、やがて下流の阿久和川に注いでいます。ここには昔の横浜の里山風景と自然が残されており、四季折々の動植物を見ることが出来ます。春にはキブシやヤマザクラが咲きせせらぎ沿いの藪の中からはウグイスの声が絶え間なく聞こえ、初夏の夜にはゲンジボタルが乱舞し幻想的な光景を見ることが出来ます。夏場はせせらぎが涼を運び水底ではサワガニが遊び、秋ともなるとアカトンボが乱舞しイナゴやバッタが湿地に群れます。晩秋には多種の木々が赤や黄色に紅葉し、やがて冬になると湿地の周辺では霜柱が目立ちますが、湧水は凍結することなく絶え間なく流れ続けます。このような弥生台の自然の営みを記録していくために、「弥生台日記」というかたちで昨年より地域の皆様に紹介を始めました。毎月 1 回から 2 回、A4 サイズ 1 枚という簡素なものですが、この緑地の良さを再認識して頂くために季節の話題を掲載しています。今年も新緑の季節を過ぎ樹木の緑が日一日と色濃くなり、湿地ではヒキガエルのオタマジャクシが群れ、カルガモたちがクレーンを食べにやってきています（弥生台のせせらぎとホタルを守る会 横田光邦）

● いたち川周辺で見られる生き物 ミシシッピーアカミミガメ

これまで、いたち川で見られる何種類かの外来生物を紹介してきましたが、今回はミシシッピーアカミミガメを紹介します。

名前の通り原産はアメリカ南部のニューメキシコからアラバマ州にかけてと、メキシコ北東部で、一九五〇年代に日本に入ってきたと思われるです。ペットショップなどで「ミドリガメ」として売られているカメで、子どもの頃は緑色で黄色い模様があります。大きくなると褐色化し、くすんだ色合いになります。さらに高齢になると全体的に黒っぽくなります。頭の両脇に赤い模様があり、遠くからでも目立ちます。

とても長生きで二〜三〇年くらい生きるといわれます。大きなものでは三〇センチ近くになります。魚や昆虫、水草などを食べます。いたち川中流域から下流でみられます。大きな石の上で甲羅干しをしている姿をよく見かけます。多い所では五、六匹も一緒にいることがあります。（いもり）

